

第 II 部

第一章 単位当たりの授業料を設定している場合の特例

1 単位あたり授業料を設定し徴収している場合（以下「単位制」という。）は、下記のルールにより取り扱うこととする。

（単位制の支給額決定ルール）

ア 支給対象単位数の上限

支給上限は、学校教育法施行規則に定める卒業要件である 74 単位とする（履修単位数であり、修得単位数ではない）。

イ 年間の支給対象単位数の上限

30 単位とする。

ウ 支給期間の上限

a 全日制高校等（b・c 以外）：36 月

b 高等学校・中等教育学校の定時制・通信制の課程：48 月

c 専修学校高等課程・一般課程の夜間等学科・通信制学科：48 月

※以下、b 及び c を「定時制課程等」という。

※支給期間は、登録単位の有無に関わらず、在学していればカウントする。ただし、休学の場合には、支給停止を申し出れば、支給期間のカウントを一時停止することができる。

エ 基準額の設定方法

1 単位の教育内容に対する対価は、課程の別にかかわらず同等と考えられることから、支給額についても、課程の別や修業年限にかかわらず、以下のとおり 1 単位あたりの支給限度額を設定する。

a 1 単位あたりの支給額

・ $118,800 \text{ 円} \times 3 \text{ 年} \div 74 \text{ 単位} = 4,816 \text{ 円} \rightarrow 4,812 \text{ 円}$

※公立の高等学校及び中等教育学校の後期課程の定時制課程にあつては 1,740 円、公立の高等学校及び中等教育学校の後期課程の通信制課程にあつては 336 円（以下、支給額の算定にあたっては、4,812 円をそれぞれの額に置き換えて計算すること）

b 1 単位あたり月額

$4,812 \text{ 円} \div \text{履修期間}$

※学校において 1 単位当たりの支給額よりも低い授業料額を設定している場合には、その授業料額 \div 履修期間として計算。

c 支給限度額

$(1 \text{ 単位あたり支給額 (月額)}) \times \text{登録単位数 (端数切捨て)}$

※加算がある場合は、加算後の数字の端数を切捨て

《例 1》

授業料額 7,000 円/単位、25 単位登録、履修期間 12 月の場合

・ 授業料月額： $7,000 \text{ 円} \div 12 \text{ 月} \times 25 \text{ 単位} = 14,583 \text{ 円}$ （端数切捨て）

・ 支給限度額： $4,812 \text{ 円} \div 12 \text{ 月} \times 25 \text{ 単位} = 10,025 \text{ 円}$

・ 支給額：授業料月額 $>$ 支給限度額 $\rightarrow 10,025 \text{ 円}$

《例 2》

授業料額 8,000 円/単位、40 単位登録、履修期間 12 月、2 倍加算の場合

・ 授業料月額： $8,000 \text{ 円} \div 12 \text{ 月} \times 40 \text{ 単位} = 26,666 \text{ 円}$ （端数切捨て）

・ 支給限度額： $4,812 \text{ 円} \div 12 \text{ 月} \times 30 \text{ 単位} \times 2 \text{ 倍} = 24,060 \text{ 円}$

・ 支給額：授業料月額 $>$ 支給限度額 $\rightarrow 24,060 \text{ 円}$

＜授業料月額の端数処理について＞

支給額算定の過程において端数切捨てをした結果、就学支援金の支給額と授業料額との間に微細な差額が生じ、特に公立高等学校の単位制課程において、当該微細な差額を授業料として徴収しなければならないケースが生じる可能性がある。

この場合においては、「授業料の月額に相当するものとして文部科学省令で定めるところにより算定した額」（法第 5 条第 1 項）を算定する過程で、履修期間内の一部の月分の授業料額を 1 円上乗せするなどの調整を行うことにより、微細な差額が生じないようにすることができる。

なお、1 円を上乗せするタイミングについては、都道府県の判断とすることが可能だが、そ

の後の履修科目の追加登録の可能性等を考慮すると、各月の端数の計が 1 円以上となるたびに上乗せをすることが適当。

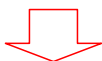
《例 1》

授業料額330円/単位、19単位登録、履修期間12月の場合

- ・ 授業料月額：330円÷12月×19単位＝522.5円 → 522円（端数切捨て）
- ・ 支給限度額：336円÷12月×19単位＝532円
- ・ 支 給 額：授業料月額＜支給限度額 → 522円

となるが、

- ・総支給額（年額）：522円×12月＝6,264円
- ・授業料総額（年額）：330円×19単位＝6,270円
- ・差額：6,270円－6,264円＝6円 → 差額6円分の授業料を徴収する必要がある。



端数の計が1円以上となる、 $5 \cdot 7 \cdot 9 \cdot 11 \cdot 1 \cdot 3$ 月分の授業料の額（522円）にそれぞれ1円上乗せする。

$$\rightarrow 522\text{円} \times 6\text{月} + 523\text{円} \times 6\text{月} = 6,270\text{円}$$

授業料総額が6,270円となり、当該額の全額について就学支援金が支給されるため、差額は生じない。

《例 2》

授業料額330円/単位、4月に19単位登録（履修期間12月）、8月に11単位登録（履修期間8月）の場合

(月ごとの授業料月額)

[illegible]

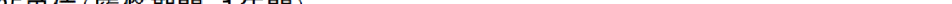
年間上限 30 単位ルールについて

【ケースA ― 年度をまたいで履修する場合の年間上限30単位の考え方 ―】

4月 5月 6月 7月 8月 9月 10月 11月 12月 1月 2月 3月

入学

26年度

27年度 

25単位(履修期間:1年間)

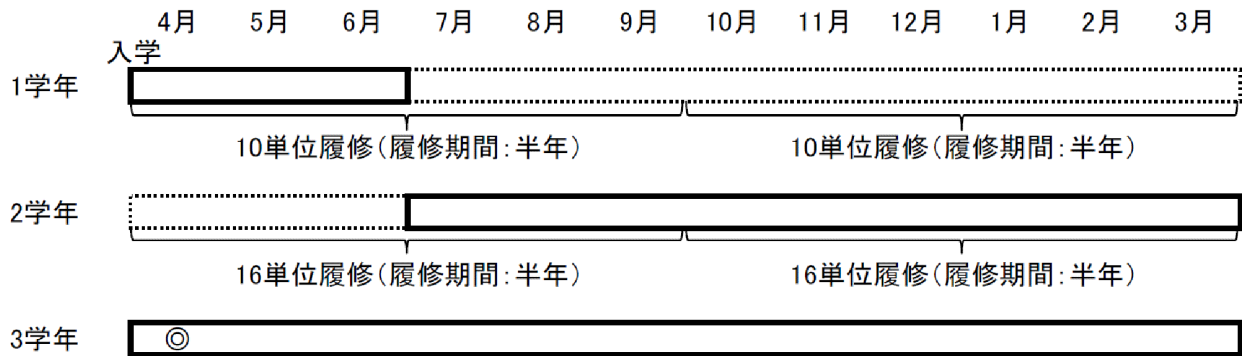
☐:受給期間

.....:所得制限による不受給期間

27年度10月分の支給対象単位数は、30単位
(26年度10月～27年度9月まで履修した25単位は、算定月(27年度10月)の属する年度において履修を開始した科目ではないため)

通算上限 74 単位ルールについて

【ケースB ― 年間30単位を超えて履修した場合の通算上限74単位の計算における扱い ―】

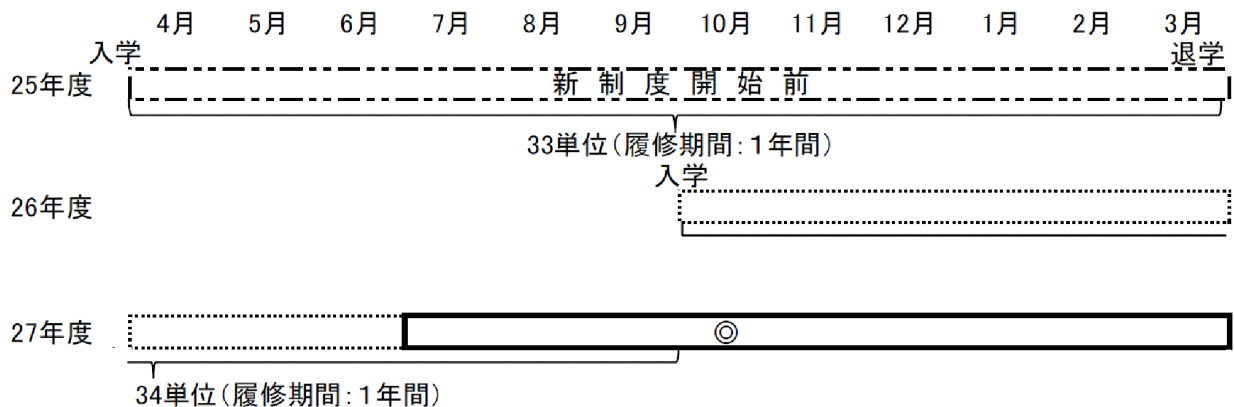


◻: 受給期間

◌: 所得制限による不受給期間

3学年4月における残支給単位数は、 $74\text{単位} - 10\text{単位} \times 2 - 30\text{単位} = 24\text{単位}$
 (2学年時の履修単位数は $16\text{単位} \times 2 = 32\text{単位}$ であるが、年間上限の30単位まで算入)

【ケースC ― 制度開始前の履修単位数の通算上限74単位の計算における扱い ―】



◻: 受給期間

◌: 所得制限による不受給期間

27年度10月における残支給単位数は、 $74\text{単位} - 33\text{単位} - 30\text{単位} = 11\text{単位}$
 (25年度の33単位は、新制度開始前の履修単位数であるため、全て74単位の計算に算入。
 26年度10月～27年度9月まで履修した34単位については、年間上限の30単位まで算入。)
 ※なお、26年度10月～27年度9月までに履修した34単位は、算定月(27年度10月)の属する年度
 において履修を開始した科目ではないため、年間上限30単位の計算には含まれず、27年度10月
 分は最大11単位支給可能。

【単位制高校の各月の支給限度額イメージ】

26年度		27年度		28年度	
4月	10月	4月	10月	4月	10月
20単位履修(支給対象20単位)		25単位履修(支給対象25単位)		25単位履修(支給対象14単位)	
支給限度額: 8,020円/月 (20単位) ①	支給限度額: 12,030円/月 (30単位) ②	支給限度額: 14,035円/月 (35単位) ③	支給限度額: 12,030円/月 (30単位) ④	支給限度額: 7,619円/月 (19単位) ⑤	支給限度額: 5,614円/月 (14単位) ⑥
		25単位履修(支給対象10単位)		25単位履修(支給対象5単位)	

※1単位当たりの単価は4,812円、履修期間は全て1年間、所得制限等により不支給の期間がない場合

上記の例では、各年度の4月と10月が「算定月」となる。

①～⑥の各期間の支給限度額の算定方法は以下のとおり。

- ①: $4,812円 \div 12月 \times 20単位 = 8,020円/月$
- ②: $4,812円 \div 12月 \times 30単位 (\times 1) = 12,030円/月$
- ③: $4,812円 \div 12月 \times 35単位 (\times 2) = 14,035円/月$
- ④: $4,812円 \div 12月 \times 30単位 (\times 1) = 12,030円/月$
- ⑤: $4,812円 \div 12月 \times 19単位 (\times 3) = 7,619円/月$
- ⑥: $4,812円 \div 12月 \times 14単位 (\times 3) = 5,614円/月$

※1) 年間上限 30 単位ルール

②の例では、算定月（1 学年の 10 月）の属する年度において、算定月の前月までに履修を開始した科目の単位数（20 単位）と算定月に履修を開始する科目の単位数（25 単位）の合計が 30 を超えるため、算定月に履修を開始する科目の単位数のうち超過分の単位数（15 単位）は支給対象とならない。④の考え方についても同様。

※2) 年間上限 30 単位ルール — 年度をまたいで履修する場合 —

1 学年の 10 月に履修を開始した 25 単位については、算定月（2 学年の 4 月）の属する年度において算定月の前月までに履修を開始した科目の単位数ではないため、算定月の属する年度において算定月の前月までに履修を開始した科目の単位数（0 単位）と算定月に履修を開始する科目の単位数（25 単位）の合計が 30 を超えず、算定月に履修を開始する科目の単位数（25 単位）全てを支給対象として合算できる。その結果、1 学年の 10 月に履修を開始した科目の単位数のうち支給対象となっている 10 単位と算定月に履修を開始する 25 単位の合計 35 単位が支給対象となる。

※3) 通算上限 74 単位ルール

（⑤について）

年間上限の扱いについては③と同様だが、算定月（3 学年の 4 月）の属する年度の前年度までに履修を開始した科目であって支給対象となったものの単位数（20 単位+10 単位+25 単位+5 単位）と算定月の属する年度において算定月の前月までに履修を開始した科目の単位数（0 単位）と算定月に履修を開始する科目の単位数（25 単位）の合計が 74 を超えるため、算定月に履修を開始する科目の単位数のうち超過分の単位数（11 単位）は支給対象として合算できない。その結果、2 学年の 10 月に履修を開始した科目の単位数のうち支給対象となっている 5 単位と 3 学年の 4 月に履修を開始する科目の単位数のうち支給対象として合算できる 14 単位（25 単位－上限超過分 11 単位）の合計 19 単位が支給対象となる。

（⑥について）

算定月（3 学年の 10 月）の属する年度の前年度までに履修を開始した科目であって支給対象となったものの単位数（20 単位+10 単位+25 単位+5 単位）と算定月の属する年度において算定月の前月までに履修を開始した科目のうち支給対象となったものの単位数（14 単位）の合計が 74 となるため、算定月に履修を開始する科目の単位数を支給対象として合算できない。その結果、3 学年の 4 月に履修を開始した科目の単位数のうち支給対象となった 14 単位が支給対象となる。

第二章 Q & A（個別具体の事務処理について）

- 1 対象となる高等学校等・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・25
 - Q 1-1 同時に2つ以上の高校に通っている場合
 - Q 1-2 同一高校内で課程を変更・2つ以上の課程を併修する場合
 - Q 1-3 2つ以上の課程を併修している場合の就学支援金の支給
 - Q 1-4 専攻科、別科、聴講生、科目履修生
 - Q 1-5 外国人学校を指定する際の手続き
 - Q 1-6 対象となっている外国人学校
- 2 住所・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・26
 - Q 2-1 「住所を有する」の解釈
 - Q 2-2 外国籍の者（無国籍の者も含む）の場合の住所確認
 - Q 2-3 留学生
 - Q 2-4 不法滞在者
 - Q 2-5 難民申請中の者
- 3 高等学校等を卒業又は修了・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・27
 - Q 3-1 海外の高等学校等を卒業または修了した者
 - Q 3-2 高卒認定試験に合格している者
- 4 在学期間・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・27
 - Q 4-1 過去の在学期間の確認
 - Q 4-2 在学期間の通算に含まれる期間
 - Q 4-3 在学期間の通算に含まれない期間
 - Q 4-4 転学した場合の在学期間の扱い
 - Q 4-5 長期停学中に授業料が発生していない場合
- 5 所得確認・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・29
 - Q 5-1 所得確認の対象
 - Q 5-2 「保護者」に含まれない親権者とは
 - Q 5-3 養子縁組をしていない場合
 - Q 5-4 親権はないが監護権がある場合
 - Q 5-5 親権者以外の同居親族等に所得がある場合
 - Q 5-6 生徒の就学に要する経費の負担を求めることが困難である親権者
 - Q 5-7 主たる生計維持者とは
 - Q 5-8 生徒が成人の場合
 - Q 5-9 保護者等が国外に在住する場合
 - Q 5-10 生徒が里親に養育されている場合・小規模住居型児童養育事業において養育を受けている場合
- 6 申請・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・31
 - Q 6-1 申請者とは
 - Q 6-2 申請書に不備・誤記がある場合の対応
 - Q 6-3 受給資格があると考えられる者が申請を拒否する場合
 - Q 6-4 課税証明書の年度
 - Q 6-5 年度途中の申請
 - Q 6-6 課税証明書以外の保護者等の道府県民税所得割額や市町村民税所得割額を明らかにできる書類
 - Q 6-7 個人番号カードの写し以外の保護者等の個人番号を明らかにできる書類
 - Q 6-8 保護者等が税の申告をしていない場合
 - Q 6-9 課税証明書等の添付が不要となる場合
 - Q 6-10 個人番号カードの写し等の添付が不要となる場合
 - Q 6-11 申請・届出をできない「やむを得ない理由」「正当な理由」とは
 - Q 6-12 申請書は提出したが、個人番号カードの写し等又は課税証明書等の提出が

遅れている場合

Q 6-13	個人情報の保護	
7	認定	34
Q 7-1	受給資格の有効期間	
Q 7-2	学校が不適切な運営をしているなど在校状態に疑義が生じている場合	
Q 7-3	受給資格消滅通知・支給実績証明書の記載事項	
8	支給額の算定・支給	34
Q 8-1	申請認定後、支給を開始する日	
Q 8-2	授業料が減額又は免除されている者	
Q 8-3	授業料減免、奨学金と就学支援金の関係	
Q 8-4	税の更正があった場合	
Q 8-5	平成 22 年の制度開始前に履修した単位の計算	
Q 8-6	平成 22 年以降受給資格を有していなかった期間に履修した単位の計算	
Q 8-7	併修先の単位の計算	
Q 8-8	定額制授業料と単位制授業料を併用している場合	
9	届出	36
Q 9-1	申請と届出の違い	
Q 9-2	年度途中で保護者等に変更があった場合	
Q 9-3	差止めについて	
Q 9-4	差止期間中に届出があった場合の支給	
10	受給権放棄	37
Q 10-1	受給権放棄の手続き	
Q 10-2	受給権放棄後に再度申請があった場合	
11	代理受領	38
Q 11-1	転学の際の代理受領	
Q 11-2	学校における会計処理	
12	休学	39
Q 12-1	支給停止の手続き	
Q 12-2	生徒から支給停止の申出がない場合	
Q 12-3	生徒が入学と同時に休学する場合	
Q 12-4	支給再開の申出があった場合の手続き	
Q 12-5	復学前に支給再開の申出があった場合	
Q 12-6	復学日までに支給再開の申出がない場合	
13	転学	40
Q 13-1	転出入する場合の支援金の算出方法	
Q 13-2	年度途中で単位制授業料の高校に転入した場合	
Q 13-3	年度途中で休学した場合の残支給期間と残支給単位	
Q 13-4	単位修得のない専修学校における履修の単位換算	
Q 13-5	前籍校での履修単位数が確認できない場合	
Q 13-6	遡って退学・除籍となった場合	
Q 13-7	旧制度が適用される場合	
14	その他	42
Q 14-1	都道府県と学校の事務分担	
Q 14-2	様式の加筆・修正の可否	
Q 14-3	時効	
Q 14-4	処分の取消	
Q 14-5	授業料と就学支援金の年度をまたいでの相殺	
Q 14-6	事務費交付金、奨学給付金、学び直し、家計急変の過年度支出	

- ※1 単に「法」、「令」、「規則」とあるのは、高等学校等就学支援金の支給に関する法律、同法施行令及び同法施行規則を示す。
- ※2 タイトル横の括弧内は事務処理要領第3版における該当箇所、括弧書きがないものは同第4版で新たに盛り込まれたものを示す。

1 対象となる高等学校等

Q1-1 同時に2つ以上の高校に通っている場合

申請者が同時に2つ以上の高校に通っている場合、申請者の選択によりいずれか一つの高校で就学支援金を受給する。二つ以上の高校で就学支援金を同時に受給することはできない（法第3条第1項）。

法第3条第1項

高等学校等就学支援金（以下「就学支援金」という。）は、高等学校等に在学する生徒又は学生で日本国内に住所を有する者に対し、当該高等学校等（その者が同時に二以上の高等学校等の課程に在学するときは、これらのうちいずれか一の高等学校等の課程）における就学について支給する。

Q1-2 同一高校内で課程を変更・2つ以上の課程を併修する場合

申請者が在学中の一つの高校内で2つ以上の課程を併修している場合、申請者の選択によりいずれか一つの課程で就学支援金を受給する。二つ以上の課程で就学支援金を同時に受給することはできない（法第3条第1項）。

また、在学中の高校内で課程を変更する場合（例：同じ高校の全日制課程から定時制課程へ転籍）は転学の場合と同様に受給資格の消滅手続きを行い、新たな課程で申請手続きを行う必要がある。この際、学校名や在籍期間など学校で了解している情報は学校で記入する、すでに個人番号カードの写し等又は課税証明書等が提出されている場合には添付をすることを要しない等、各支給権者の判断で申請者の事務負担軽減を図ることも可能である。

Q1-3 2つ以上の課程を併修している場合の就学支援金の支給

就学支援金の支給を受ける高等学校等に当該授業に係る授業料を支払っており、また、併修先等での学習が卒業に必要な単位に換算されるような場合においては、就学支援金の支給を受ける高等学校等の課程の支給限度額を上限として就学支援金を支給して差し支えない。

よって、就学支援金の支給を受ける高等学校等に授業料を支払わない場合は、卒業に必要な単位に換算される場合であっても、就学支援金は支給されない。

また、定時制や通信制等の併修先であって就学支援金の支給を受ける高等学校等ではない他の高等学校等において授業を受ける場合や高等学校等以外の学校（大学、専門学校、就学支援金制度の対象となっていない専修学校一般課程など）において授業を受ける場合も同様である。

Q1-4 専攻科、別科、聴講生、科目履修生

専攻科及び別科の生徒や聴講生、科目履修生は就学支援金の支給対象とならない。

Q1-5 外国人学校を指定する際の手続き

各種学校であって、我が国に居住する外国人を専ら対象とするもの（いわゆる外国人学校）に通う生徒に就学支援金を支給する場合は、当該外国人学校が就学支援金の支給の対象として文部科学大臣の告示で指定されている必要がある（法2条5号、規則1条2項）。

指定を受けるためには、1）大使館を通じて日本の高等学校の課程に相当する課程であることを確認できること、または、2）国際的に実績のある、学校の評価を行う団体の認証を受けていることを確認できる必要がある（規則第1条第1項第4号）。

各種学校である外国人学校であって、現時点で指定されていない学校が上記の指定の要件を満たしたこと、または、現時点で指定されている学校が指定の要件から外れたことが判明した場合は、文部科学省修学支援プロジェクトチームまで御連絡されたい。

法第2条第5号

この法律において「高等学校等」とは、次に掲げるものをいう。

専修学校及び各種学校（これらのうち高等学校の課程に類する課程を置くものとして文部科学省令で定めるものに限り、学校教育法（昭和二十二年法律第二十六号）第一条に規定する学校以外の教育施設で学校教育に類する教育を行うもののうち当該教育を行うにつき同法以外の法律に特別の規定があるものであるもの、高等学校の課程に類する課程を置くものとして文部科学省令で定めるもの（第四条及び第六条第一項において「特定教育施設」という。）を含む。）

規則第1条第1項第4号、同条第2項

高等学校等就学支援金の支給に関する法律（平成二十二年法律第十八号。以下「法」という。）第二条第五号に掲げる専修学校及び各種学校のうち高等学校の課程に類する課程を置くものとして文部科学省令で定めるものは、次に掲げるものとする。一～三（略）

四 各種学校であって、我が国に居住する外国人を専ら対象とするもののうち、次に掲げるもの

イ 高等学校に対応する外国の学校の課程と同等の課程を有するものとして当該外国の学校教育制度において位置付けられたものであって、文部科学大臣が指定したもの

ロ イに掲げるもののほか、その教育活動等について、文部科学大臣が指定する団体の認定を受けたものであって、文部科学大臣が指定したもの

2 前項第四号の指定又は指定の変更は、官報に告示して行うものとする。

Q1-6 対象となっている外国人学校

現在告示で指定されている外国人学校は全42校である。文部科学省ホームページでも公開されているため、随時最新のものを確認されたい。

URL：http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/mushouka/1307345.htm

2 住所

Q2-1 「住所を有する」の解釈

就学支援金は、生徒が日本国内に住所を有することを支給要件としている（法3条）。法令に特段の定めがない場合、「住所」とは民法第22条の「人の生活の本拠」、すなわちその者の生活全般の活動の中心となる本拠を意味する（最判昭29.10.20等）。

「住所を有する」とは、当該申請者に関する事項が住民基本台帳に記載されていることと解して差し支えない。よって、疑義が生じた場合には、原則、住民票により確認すること。

Q2-2 外国籍の者（無国籍の者も含む）の場合の住所確認

申請者が外国籍の者の場合の住所地は出入国管理及び難民認定法に基づく在留カード、住民票、仮滞在許可書による。提携する民間教育施設を海外に有する広域通信制高校については、受給資格の認定の際に留意すること。

Q2-3 留学生

在留カード、住民票、仮滞在許可書により日本国内に住所を有していると認められる場合であれば、日本の高等学校等に在籍しながら海外に留学している者や海外から日本の広域通信制高校等の授業を受けている者、外国籍の者、海外からの留学生についても支給の対象となる（ただし、いわゆる国費留学生や交換留学生等で、授業料の支払いが免除されている者には就学支援金は支給されない）。

また、いわゆる交換留学生協定などにに基づき、留学先の現地校ではなく在籍する日本の高等学校等に授業料を支払っており、かつ、留学先の現地校での学習が卒業に必要な単位に換算されるような場合においては、就学支援金を支給して差し支えない。

Q2-4 不法滞在者

社会保障制度を外国人に適用する場合には、そのよって立つ社会連携と相互扶助の理念から、国内に適法な居住関係を有する者のみを対象者とするのが一応の原則である（最判昭50.3.30）。

就学支援金は、社会全体の負担である国費で生徒の学びを支える制度であるため、不法滞在者は就学支援金の支給の対象とはならない。

Q2-5 難民申請中の者

適法に生活の本拠を構える外国人であれば、就学支援金の対象となり得る。難民申請中又は審査請求中に仮滞在が認められた場合には転入を届け出ることとされており、それにより住民票を取得

できる（住民基本台帳法第 30 条の 46）。

若しくは、難民申請前に中長期（3 か月以上）の在留資格により適法に在留していた場合は、在留カードが交付される。住民票または在留カードにより、日本に住所を有する者であることが確認でき、また、個人番号カードの写し等及び課税証明書等の取得も可能となる。

3 高等学校等を卒業又は修了

Q 3-1 海外の高等学校を卒業または修了した者

高等学校等（修業年限が 3 年未満のものを除く）を卒業し又は修了した者については、卒業した学校の国公私立の別を問わず就学支援金を受給することができないが（法第 3 条第 2 項第 1 号）、海外の高等学校は法第 2 条で定義される「高等学校等」に含まれないため、海外の高等学校を卒業または修了した者が就学支援金の支給の対象となる学校に編転入した場合、その他の要件を満たせば就学支援金を受給することができる。

法第 2 条

この法律において「高等学校等」とは、次に掲げるものをいう。

- 一 高等学校（専攻科及び別科を除く。以下同じ。）
- 二 中等教育学校の後期課程（専攻科及び別科を除く。次条第三項及び第五条第三項において同じ。）
- 三 特別支援学校の高等部
- 四 高等専門学校（第一学年から第三学年までに限る。）
- 五 専修学校及び各種学校（これらのうち高等学校の課程に類する課程を置くものとして文部科学省令で定めるものに限り、学校教育法（昭和二十二年法律第二十六号）第一条に規定する学校以外の教育施設で学校教育に類する教育を行うもののうち当該教育を行うにつき同法以外の法律に特別の規定があるものであって、高等学校の課程に類する課程を置くものとして文部科学省令で定めるもの（第四条及び第六条第一項において「特定教育施設」という。）を含む。）

法第 3 条第 2 項第 1 号

- 2 就学支援金は、前項に規定する者が次の各号のいずれかに該当するときは、支給しない。
 - 一 高等学校等（修業年限が三年未満のものを除く。）を卒業し又は修了した者

Q 3-2 高卒認定試験に合格している者

就学支援金は、高校で履修した授業の授業料に対して支給されるものであるため、受給権者が高等学校卒業程度認定（旧大学入学資格検定）に合格していても、高等学校等を卒業又は修了していなければ支給される。

4 在学期間

Q 4-1 過去の在学期間の確認

生徒の過去の高等学校等における在学期間に係る記入欄については、原則、生徒側からの申告に基づくこととする。過去の学校の在学証明までを求める必要はない。ただし、生徒側からの申告に誤りがあることが疑われるなどの事情がある場合は、必要に応じて当該学校に確認の上、記入する。また、申請書における過去の学校の在学期間の記入欄が不足する場合は、必要に応じて別紙により提出させること。

指導要録の保存年限が経過したなど、過去の在学期間を証明するものがない場合も、原則どおり本人の申告に基づき在学期間を判定する。この場合、申立書を作成してもらうことにより記録を残すとともに、意図的に不正受給を行った場合には、罰則の対象となる場合があることを周知することなどにより、虚偽の申請を抑制する方法を採ることが考えられる。

過去に就学支援金を受給したことがある生徒には、「受給資格消滅通知」又は「支給実績証明書」を添付させ、これにより過去の支給実績を確認の上、支給期間を決定すること。

Q 4-2 在学期間の通算に含まれる期間

高等学校等に在学した期間（月の初日に在学した月を 1 月として計算）が通算して 36 月（3 年制か 4 年制にかかわらず、高等学校・中等教育学校の定時制・通信制課程又は専修学校高等課程・一般課程の夜間等学科・通信制学科の場合は 48 月）を超える者は、就学支援金を受給することができない。

また、平成 25 年度の法改正により、平成 26 年度より新たに対象となった国家資格者養成施設の指定を受けている各種学校については、過去の在学期間を全て通算する。

なお、各種学校となっている外国人学校については、高等学校の課程に類する課程を置くものとして文部科学省で指定される前の在学期間は通算しない。

Q 4-3 在学期間の通算に含まれない期間

在学期間の計算の特例（規則第 2 条）として、在学期間の通算に含まれない期間は以下のとおり。

- ① 所得制限に係る要件に該当することにより就学支援金が支給されない者が高等学校等を休学した期間。（所得制限に係る要件に該当することを見越して認定申請を行わない者も含むものとする。この場合において、個別具体的に当該者の所得について確認する必要はなく、認定申請を行っていない時期に休学していたことを確認することができれば、当該休学期間を除外しても差し支えない。）
- ② 平成 22 年 4 月以前に公立高等学校等（公立の高等学校、中等教育学校の後期課程及び特別支援学校の高等部並びに規則第 1 条第 2 号に掲げる専修学校一般課程及び各種学校であって国家資格者養成施設の指定を受けているもの）以外の高等学校等を休学した期間
- ③ 平成 26 年 4 月 1 日以前に公立高等学校等を休学した期間
- ④ 高等学校の課程に類する課程を置くものとして文部科学省令で指定される前の各種学校となっている外国人学校における在学期間
- ⑤ 日本に住所を有しない期間（例えば、海外の高等学校から日本の高等学校に転学する場合の海外の高等学校における在学期間）は、36 月の期間の通算から除く。
- ⑥ 外国の高等学校や在外教育施設から日本の高等学校等に転入学した場合、転入学時から最大 36 月（定時制課程等は 48 月）就学支援金が支給される。
- ⑦ 所得制限基準に係る要件に該当するため受給権を有していない者が休学した場合は、当該休学期間が自動的に 36 月の受給期間の通算から除かれるが、就学支援金の支払の一時差止めを受けている者については、引き続き受給権者の地位を有しているため、休学し支給停止を希望する際は、支給停止の申出が必要となる。

Q 4-4 転学した場合の在学期間の扱い

転学したか否かにかかわらず、高等学校等に在学している期間が 36 月までの者（定時制課程等は 48 月）には、就学支援金が支給される。

したがって、高等学校等から他の高等学校等へ転学した場合には、編入学・再入学を問わず、36 月からそれまでの通算在学期間（支給停止期間を除く。）を除いた月数について就学支援金が支給される。

Q 4-5 長期停学中に授業料が発生していない場合

生徒が長期の停学中であり、授業料減免により授業料徴収されていない場合でも、休学と停学は学校教育法上の位置づけが異なる処分であるため、停学を休学と同様とみなして法第 8 条に基づく就学支援金の支給を停止することはできない。

よって、長期停学中に授業料減免により授業料が徴収されていない期間も、在学期間に通算する。

法第 8 条

就学支援金は、受給権者が支給対象高等学校等を休学した場合その他の政令で定める場合において、受給権者が、文部科学省令で定めるところにより、支給対象高等学校等の設置者を通じて、都道府県知事に申し出たときは、政令で定めるところにより、その支給を停止する。

2 前項の規定により当該月に係る就学支援金の支給が停止された月は、第三条第三項の規定による同条第二項第二号の期間の計算については、その初日において高等学校等に在学していた月には該当しないものとみなす。

令第 5 条（就学支援金の支給の停止）

法第八条第一項の政令で定める場合は、受給権者が支給対象高等学校等を休学した場合とする。

学校教育法施行規則 第 26 条

校長及び教員が児童等に懲戒を加えるに当つては、児童等の心身の発達に応ずる等教育上必要な配慮をしなければならない。

2 懲戒のうち、退学、停学及び訓告の処分は、校長（大学にあつては、学長の委任を受けた学部長を含む。）が行う。

学校教育法施行規則 第 94 条 生徒が、休学又は退学をしようとするときは、校長の許可を受けなければならない。

5 所得確認

Q 5-1 所得確認の対象

所得確認の際は、原則、所得の有無にかかわらず保護者等全員についての個人番号カードの写し等又は課税証明書等を提出する必要がある。保護者とは法第3条において学校教育法第16条に規定する保護者とされており、学校教育法第16条では、保護者とは、子に対して親権を行う者又は親権を行う者がいない場合は未成年後見人であると規定している。就学支援金の支給額の判断基準となる保護者等は以下の順で判断する。

① 親権者

親権者とは、子に対して親権を行う者であり、一義的には実父母が共同で親権を行う。協議離婚の場合は、どちらか一方が親権者となる。ただし、児童福祉法第33条の2第1項、第33条の8第2項又は第47条第2項の規定により親権を行う児童相談所長、児童福祉法第47条第1項の規定により親権を行う児童福祉施設の長を除く。

② 未成年後見人

親権者がいない場合は、未成年後見人が支給額の判断基準となる。ただし、法人である未成年後見人及び民法第857条の2第2項に規定する財産に関する権限のみを行使すべきこととされた未成年後見人を除く。

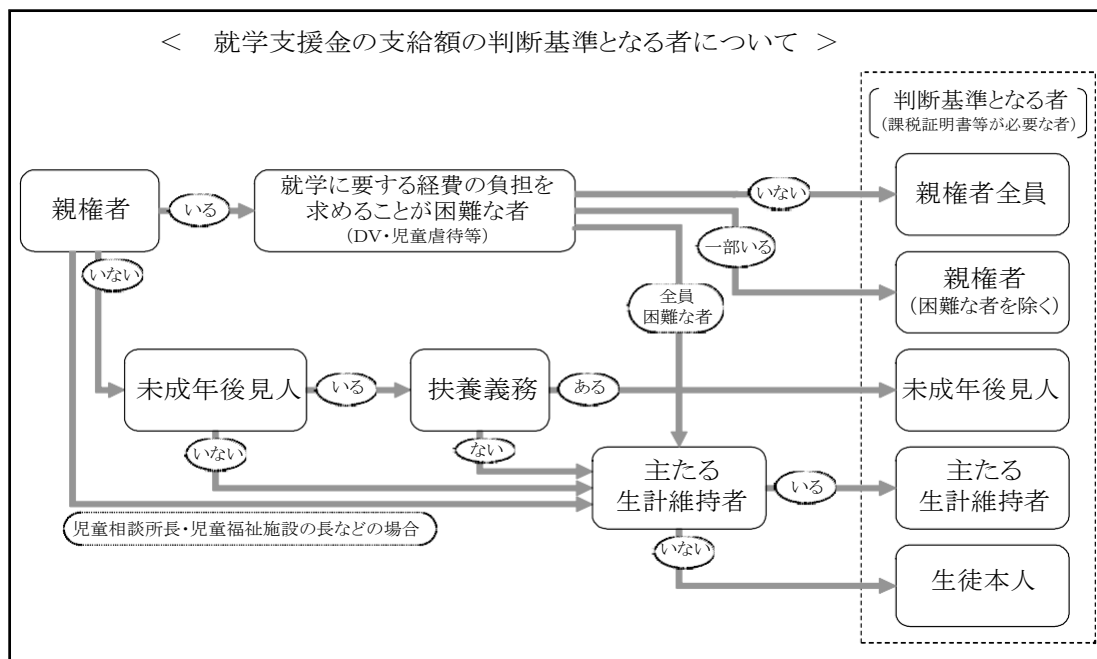
③ 主たる生計維持者

生徒に保護者がいない場合には、基準となる税額は、生徒が主として他の者の収入により生計を維持している場合にはその者（主たる生計維持者）の税額となる。

④ 生徒本人

保護者及び主たる生計維持者がいない場合は生徒本人の税額で判断する。この場合、生徒本人が道府県民税所得割や市町村民税所得割を課されるだけの収入を得ていない場合は、課税証明書等の添付を要しないことができる（未成年である者に限る）。

一方、個人番号を利用して道府県民税所得割額や市町村民税所得割額を確認する場合は、情報連携により、簡便かつ正確に確認が可能であるため、生徒本人が道府県民税所得割や市町村民税所得割を課されるだけの収入を得ていない場合でも、個人番号カードの写し等の提出を求める。



Q 5-2 「保護者」に含まれない親権者とは

親権者が、生徒の就学に要する経費の負担を求めることが困難であると認められる者である場合には、本法の適用においては、その者は保護者には含まれない。

Q 5-3 養子縁組をしていない場合

保護者（親権者）が再婚した場合に、再婚相手が生徒と養子縁組等を行わないことにより、生徒の親権者とならない場合は、当該者は、就学支援金制度における保護者には該当しない。

Q 5-4 親権はないが監護権がある場合

税額を判断する基準となる保護者は、生徒の親権を行う者であり、実質的な監護関係によって判断するものではない。

Q 5-5 親権者以外の同居親族等に所得がある場合

生徒本人や保護者以外の家族に所得がある場合であっても、本人や保護者以外の家族の所得は合算しない。

Q 5-6 生徒の就学に要する経費の負担を求めることが困難である親権者

保護者が未成年後見人の場合であって、その未成年後見人が生徒の扶養義務（民法に定める物をいう）を負わない者であるときは、生徒の「就学に要する経費の負担を求めることが困難であると認められる保護者」に該当すると考えることができる。

Q 5-7 主たる生計維持者とは

生計を維持している者という概念は、健康保険法等で扶養者と被扶養者の関係を定めるに当たって用いられている概念と同等の者であるので、簡便な確認手段として、たとえば健康保険証を確認すること等によることが考えられる。

Q 5-8 生徒が成人の場合

成人には親権者がいないため、成年に達した生徒の場合には本法の適用上「受給権者に保護者がいない場合」にあたる（未成年者であっても婚姻した場合は成年に達したものとして取り扱う。）

Q 5-9 保護者等が国外に在住する場合

所得確認を行う保護者等が国外に在住する場合（在住していた場合）においては、次のとおりとする。

- ① 所得制限基準該当性の判定の際、保護者等の全員又は一部が市町村民税の賦課期日（1月1日）に日本国内に在住しておらず、道府県民税所得割額や市町村民税所得割額が確認できない場合（親の海外赴任、海外からの留学生など）
→日本国内に在住している保護者等のみの道府県民税所得割額や市町村民税所得割額との合算額により基準該当性を判定（日本国外に在住する保護者等の所得については確認しない。）
→日本国内に在住している保護者等がないときは、通常の支給限度額を支給。
- ② 加算支給基準該当性の判定においては、保護者等の全員が市町村民税の賦課期日に日本国内に在住することが必要（保護者等の一部でも市町村民税の賦課期日に日本国内に在住していない（都道府県民税所得割額や市町村民税所得割額が確認できない）場合は、加算支給は認められない。）

Q 5-10 生徒が里親に養育されている場合・小規模住居型児童養育事業において養育を受けている場合

本法上の「保護者」が両親でない者の場合には、当該保護者の道府県民税所得割額と市町村民税所得割額の合算額をもって判断する。

ただし、以下の者が保護者である場合で、生徒本人又は生徒が主として他の者の収入により生計を維持している場合にはその者の所得により判断する。

- ① 児童福祉法第33条の2第1項、第33条の8第2項又は第47条第2項の規定により親権を行う児童相談所長
- ② 児童福祉法第47条第1項の規定により親権を行う児童福祉施設の長
- ③ 法人である未成年後見人
- ④ 民法第857条の2第2項に規定する財産に関する権限のみを行使すべきこととされた未成年後見人

生徒が里親に養育されている場合や小規模住居型児童養育事業（ファミリーホーム）において養育

を受ける場合には、主たる生計維持者がいる場合は当該者、いない場合は生徒本人の税額により判断する。

ただし、親権者（生徒の就学に要する経費の負担を求めることが困難であると認められる者を除く）がいる場合又は里親が未成年後見人（扶養義務のある者に限る）に選任されている場合は、当該親権者又は里親の税額により判断する。

6 申請

Q 6-1 申請者とは

認定申請は当該高等学校等に在学中に限り可能（高等学校等に在学していない者が将来高等学校等に入学することを前提として申請することは不可能）。

認定申請を行う者は「生徒」であり、申請に当たって保護者の同意は必要ない。ただし、「生徒」が未成年の場合、認定申請書は親権者等の法定代理人が記入して差し支えない。また、受給資格認定において年齢は問わない。

Q 6-2 申請書に不備・誤記がある場合の対応

提出のあった記入事項に不備・誤記がある場合は、生徒・保護者等に確認の上、学校・都道府県職員が代わって申請書等に記入・訂正するなどの対応も可能である。

その際、代わって記入・訂正したことが明らかになるようにし、記入した日時、記入者、確認方法等について記録を残しておくことが望ましい（申請書の余白に記入、メモを添付するなど）。

Q 6-3 受給資格があると考えられる者が申請を拒否する場合

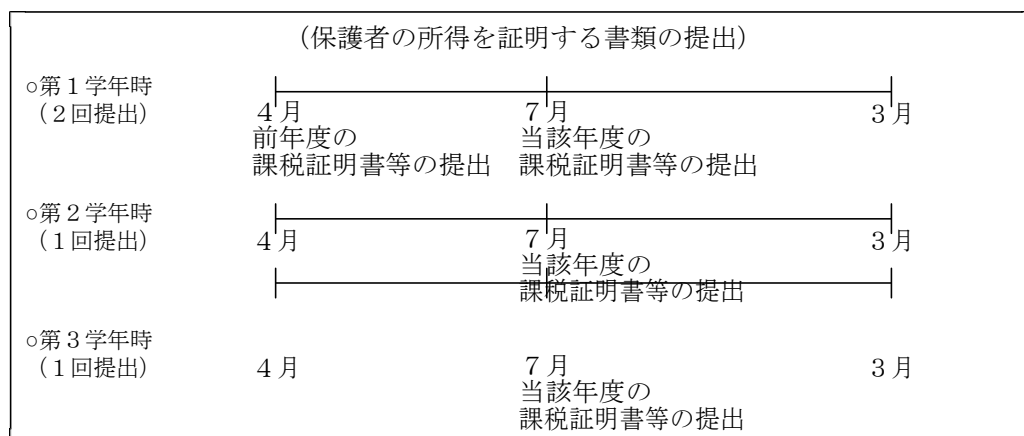
生徒自身の意思で認定申請を行わない場合は、当該生徒は就学支援金を受給することができない。（学校設置者は通常の授業料を生徒から徴収することになる。）

Q 6-4 課税証明書の年度

4～6月分の支給については、前年度の課税証明書等（前々年の所得を証明するもの。以下同じ。）を提出し、7月～翌年3月については、当該年度の課税証明書等（前年の所得を証明するもの。以下同じ。）を提出することが必要となる。

課税証明書等の保護者の所得を証明する書類は通常毎年6月中に発行されるので、就学支援金の支給を希望する生徒は、第1学年時の4月に前年度の課税証明書等を提出し、7月～翌年6月の支給については、「7月末を目途として都道府県の定める提出期限」までに当該年度の課税証明書等を添付した収入状況届出書を提出する必要がある。

その後は、第2学年時及び第3学年時の「7月末を目途として都道府県の定める提出期限」までに、当該年度の課税証明書等を添付した収入状況届出書を提出する。



課税証明書等は原本を提出することが望ましいが、県の判断により、複写としても差し支えない。

Q 6-5 年度途中の申請

年度途中に就学支援金の受給資格認定を申請した場合、申請をした月（月の初日に在学していない場合は翌月）から支給し、「やむを得ない理由により・・・申請をすることができなかった場合」（法第6条第3項）に当たると認められる場合を除いて、遡って就学支援金を支給できない。

Q 6-6 課税証明書以外の保護者等の道府県民税所得割額や市町村民税所得割額を明らかにできる書類

保護者等の所得を証明する書類をどのような書類とするかは、道府県民税所得割額や市町村民税所得割額が確認できる市町村の長の証明書その他の書類について、都道府県が判断する。

＜課税証明書以外で道府県民税所得割額や市町村民税所得割額が確認できる書類＞

- 保護者等が給与所得者で勤務先以外からの収入がない場合は、毎年5～6月に勤務先から配付される納税義務者用の特別徴収額の決定・変更通知書。
- 自営業などの場合は、毎年6月に発行される市町村民税の納税通知書。
- 生徒が1月1日現在で生活保護法による生活扶助を受けている世帯に属している場合には、翌年度の道府県民税所得割及び市町村民税所得割が非課税となることから、保護者の所得を証明する書類として、生活保護受給証明書（就学支援金が支給される月の属する年（1～6月分についてはその前年）の1月1日時点で生活保護の対象であることが確認できるものに限る。）を提出することにより、2.5倍加算の対象となる。

Q 6-7 個人番号カードの写し以外の保護者等の個人番号を明らかにできる書類

個人番号カードを有していない場合には、原則として通知カードの写しまたは個人番号が記載された住民票の写し・住民票記載事項証明書により保護者等の個人番号を確認することができる。

これらの添付が困難な場合には、地方公共団体システム機構への確認、過去に本人確認の上、特定個人情報ファイルを作成している場合には、当該特定個人情報ファイル、官公署又は個人番号利用事務実施者・個人番号関係事務実施者から発行・発給された書類その他これに類する書類であって個人番号利用事務実施者が適当と認める書類（個人番号、氏名、生年月日または住所が記載されているもの）によるほか、様式第1号（その2）により課税証明書を添付して申請を求める。

Q 6-8 保護者等が税の申告をしていない場合

個人番号カードの写し等を添付して申請する場合は、課税義務がなく税の申告を行っていない場合には、課税額がないことを情報連携により把握が可能である。課税証明書を添付して申請する場合には、生徒の保護者等が税の申告を行っていないため課税証明書が取得できないのか単に課税証明書の取得を怠っているのか判別できないため、税の申告を行った上で課税証明書等を取得し、県へ提出するものとする。課税証明書等が提出されない場合、受給資格の認定ができないまたは差止めとなるため、就学支援金は支給されない（上記Q 5-1の道府県民税所得割額と市町村民税所得割額を確認すべき者が未成年の生徒本人である場合は除く。）。なお、保護者等が申告を行わないことが養育放棄に該当すると判断されるときは、親権者が存在するものの、家庭の事情によりやむを得ず、親権者の個人番号カードの写し等または課税証明書等を提出できない場合に該当するかどうかを、改めて確認すること。

その上で、県の判断により、当該生徒について、「7月末を目途として都道府県の定める提出期限」を延長し、保護者等が申告を行った後に個人番号カードの写し等または課税証明書等を提出させることは可能。

Q 6-9 課税証明書等の添付が不要となる場合

保護者のうち片方が控除対象配偶者であれば、ほとんどの場合、収入が100万円以下となるため地方税法の規定により道府県民税所得割及び市町村民税所得割が非課税となるが、控除対象配偶者であっても、収入が100万円を超える場合には、道府県民税所得割や市町村民税所得割が課されることとなる。ただし、道府県民税所得割や市町村民税所得割が課されたとしても、最大で5,000円程度であるため、所得制限の要件や加算支給の区分に影響がないことが明らかな場合は、必ずしも、非課税証明書の提出を求める必要はない。なお、収入が100万円以下である場合には、地方税法の規定により、道府県民税所得割及び市町村民税所得割は課されない。

また、ドメスティックバイオレンス（DV）や養育放棄、児童虐待のため接触することにより危害が及ぶことが考えられる場合や失踪により接触することができない場合など、家庭の事情によりやむを得ず、親権者のうち一方又は双方の証明書類が提出できない場合には、もう一方の保護者又は本人の所得のみにより判断することができる。（申請書2.（2）②ウ、④、⑤又は（2）-2⑥）

例えば、次のケースも上記の場合に該当する。

- ・離婚協議中で別居中であり、親権者の一方に課税証明書等の提出を求めたが応じてもらえない場合。
- ・自らが経営する会社の倒産などにより親権者が住民税の申告を行わない場合であって、生徒本

人が税の申告・課税証明書等の取得を求めたが応じてもらえない場合。

上記のやむを得ない理由については、個別のケースに応じて、県において柔軟に判断すること。判断が容易でない場合は、必要に応じて文部科学省の修学支援プロジェクトチームまで相談すること。

Q 6-10 個人番号カードの写し等の添付が不要となる場合

親権者、未成年後見人、または主たる生計維持者の全員が平成 27 年 10 月 5 日以降日本に住所を有したことがないため、個人番号の指定を受けていない場合は、個人番号カードの写し等の添付は不要である（個人番号カードや通知カードを有していない場合ではないことに留意）。（申請書 2（2）⑥）その場合、就学支援金の基準額を支給することとなる。

また、ドメスティックバイオレンス（DV）や養育放棄、児童虐待のため接触することにより危害が及ぶことが考えられる場合や失踪により接触することができない場合など、家庭の事情によりやむを得ず、親権者のうち一方又は双方の個人番号カードの写し等が提出できない場合には、もう一方の保護者又は本人の所得のみにより判断することができる。（申請書 2（1）②イ、④、⑤）

例えば、次のケースも上記の場合に該当する。

- ・離婚協議中で別居中であり、親権者の一方に個人番号カードの写し等の提出を求めたが応じてもらえない場合。
- ・自らが経営する会社の倒産などにより親権者が住民税の申告を行わない場合であって、生徒本人が税の申告・個人番号カードの写し等の提出を求めたが応じてもらえない場合。

上記のやむを得ない理由については、個別のケースに応じて、県において柔軟に判断すること。判断が容易でない場合は、必要に応じて文部科学省の修学支援プロジェクトチームまで相談すること。

Q 6-11 申請・届出をできない「やむを得ない理由」「正当な理由」とは

法第 6 条第 3 項に規定する、「やむを得ない理由」としては、災害への被災や長期にわたる病欠、税の更正、保護者等の病気や仕事の都合（長期にわたる入院、療養、海外出張等の真にやむを得ない場合に限る。）、ドメスティックバイオレンス（DV）や養育放棄等の家庭の事情により期限までに課税証明書等の取得・提出ができないなど、本人の責めに帰さない場合が考えられる。認定申請をすることができなかった場合の「やむを得ない理由」の判断を行うのは県であるが、実質的な確認作業を学校設置者が行ってもよい。

法第 9 条の「正当な理由」とは、受給資格認定時における法第 6 条第 3 項に規定する「やむを得ない理由」と同様である。

上記のやむを得ない理由又は正当な理由については、就学支援金制度が教育の機会均等に寄与することを目的としていることを踏まえつつ、個別のケースに応じて、県において柔軟に判断すること。判断が容易でない場合は、必要に応じて文部科学省修学支援プロジェクトチームまで相談すること。

Q 6-12 申請書は提出したが、課税証明書等の提出が遅れている場合

保護者等の個人番号カードの写し等または課税証明書等の取得・提出が遅れ、申請書等の提出期限に間に合わない場合には、申請書のみ先に提出させ、個人番号カードの写し等または課税証明書等は後に補填することにより対応する（申請日は申請書等の提出日とする）など、可能な限り柔軟に受付を行うようにすること。

個人番号カードの写し等または課税証明書等の補填の期限については、各都道府県において生徒の状況を確認しつつ、適切に設定し、提出を求めること。個人番号カードの写し等または課税証明書等の補填に時間を要している場合は、親権者が存在するものの、家庭の事情によりやむを得ず、親権者の個人番号カードの写し等または課税証明書等を提出できない場合に該当するかどうかを、改めて確認すること。また、提出可能な場合には、生徒の状況に配慮しつつも、本来申請書と同時に提出すべきものであることも踏まえ、すみやかに提出されるように促すこと。収入状況届出書の場合も同様である。

Q 6-13 個人情報の保護

就学支援金事務に伴い入手した個人情報は、個人情報保護法及び各都道府県の個人情報保護条例等の法令に基づき、適切に管理する必要がある。

特に、個人番号等の特定個人情報については、行政手続における特定の個人を識別するための番号の利用等に関する法律（平成 25 年法律第 27 号）をはじめとする関係法令に加え、個人情報保護委員会の定める「特定個人情報の適正な取扱いに関するガイドライン（行政機関等・地方公共団体等編）」や各都道府県において定める「特定個人情報等の安全管理に関する基本方針」も踏まえ、適切に管理

する必要がある。

7 認定

Q 7-1 受給資格の有効期間

受給資格は、一度認定を受ければ在学中継続して有効であり、年度毎に改めて認定を受ける必要はない。また、休学中に支給停止している間も受給資格は有効である。

ただし、所得制限により受給資格が消滅した者が再度支給を受けようとするときや転学などの場合には再度認定を受ける必要がある。

Q 7-2 学校が不適切な運営をしているなど在校状態に疑義が生じている場合

法第3条において、「高等学校等に在学する生徒又は学生で日本国内に住所を有する者に対し、当該高等学校等（括弧内省略）における就学について支給する」とされていることから、受給資格認定の際、学校運営が著しく不適切に行われているなどにより、支給対象高等学校等における生徒の在学そのものに疑義が生じている場合には、当該学校に通う生徒の受給資格認定を留保し、当該学校や県において当該学校を所管する部局（構造改革特別区域法第12条に基づき株式会社の設置する学校については、同条に定める認定地方公共団体）に対し確認をすること。

また、認定後において不正等が発覚した場合には、法第11条に定める不正利得の徴収を行うなど厳正に対処されたい。

上記の取扱いについては、支給対象となる高等学校等に対し予め周知すること。

Q 7-3 受給資格消滅通知・支給実績証明書の記載事項

定額の授業料を定める学校に在学していた生徒が単位制授業料を定める学校に転編入する場合に、転出県の県知事の受給資格消滅通知に履修単位数等の記載がない場合は、転入県において、就学支援金事務を処理する上で必要となる当該生徒が履修した科目の単位数について、指導要録等に基づいて把握し、または、教育課程表等の他の資料と併せて把握が可能であれば、それらによって受給資格の認定を行うことは問題ない。

なお、特段の事情により、履修単位の把握が困難な場合には、Q13-5によって、処理することもやむをえない。

8 支給額の算定・支給

Q 8-1 申請認定後、支給を開始する日

就学支援金は、受給権者である生徒がその初日において支給対象高等学校等に在学する月について支給されるものである。

入学は学校長が許可するものであり、入学日は学校長が許可した日となるが、通常、学年は4月1日に始まり翌年3月31日に終わることから、4月分の支給に関しては、特段の定めがない場合は、入学式の日にかかわらず入学日は4月1日として取り扱って差し支えない。ただし、条例等において、入学日を4月2日以降の日として規定している場合は、4月分が支給されないが、たとえば、「高等学校等就学支援金の支給に関する限りにおいて、生徒が4月1日に在学しているものとみなす。」などと条例、規則、学則等において規定することにより、4月分の就学支援金を支給することは可能。

就学支援金の支給は、原則として、認定申請書が代理受給者である学校設置者に到達した日が属する月の分から支給される。（たとえば、4月に入学した者が5月になって認定申請書を学校に提出した場合、「やむを得ない理由により・・・申請をすることができなかった場合」（法第6条第3項）に当たると認められない限り、4月分は支給されない。）

Q 8-2 授業料が減額又は免除されている者

就学支援金は、授業料が全額免除されたことにより授業料支払債務が発生していない生徒（いわゆる「特待生」）には支給されない。授業料が一部のみ免除され授業料の支払債務がある生徒はその債務額を限度として支給される。

なお、施設整備費など授業料以外の納付金については就学支援金の支給対象としない。

Q 8-3 授業料減免、奨学金と就学支援金の関係

就学支援金の額は、支給対象高等学校等の授業料の月額に相当する額（支給限度額を超える場合にあっては、支給限度額）とされており（法第5条第1項）、すなわち、支給対象高等学校等の設置者である学校法人が有する受給権者（生徒）の授業料に係る債権（以下「授業料債権」という。）の額となる。

ここで、「授業料減免」については、一般的に、学校法人等が、授業料債権そのものを変更することで、授業料の一部又は全部を免除することを意味している。

このため、学校法人等が「授業料減免」を実施する場合の就学支援金の額は、「授業料減免」による変更後の授業料債権の額となる。

また、「奨学金」については、一般的に、学校法人等が、その有する授業料債権とは別途、生徒に対して給付する学資金を意味している。このため、学校法人等が「奨学金」を給付する場合には、授業料債権の額に変更は生じない。

すなわち、学校法人等において「奨学金」を授業料債権と相殺し、実際に金銭を生徒に給付しない場合であっても就学支援金は支給される。

Q8-4 税の更正があった場合

受給資格の認定を受けていない者や、収入状況届出において所得制限に該当したことにより、受給資格が消滅した者が、税の更正により、受給資格を満たすことになった場合は、やむを得ない理由がやんだ後（更正通知書を受け取った日の翌日から）15日以内に、受給資格の認定申請を行った場合には、遡って申請があったものとみなして差し支えない。

また、収入状況届出をせずに、差止め処分を受けた者が、税の更正により、受給資格を満たすことになり、収入状況届出が行われた場合には、遡って届出があったものとみなして差し支えない。

加えて、就学支援金の支給を受けている者が、税の更正により、支給額の加算区分が増額となる場合には、税の更正後に保護者の収入に変更があったものとして、規則第11条第3項に基づき、収入状況届出を行う必要がある。

県は当該届出を踏まえ、本来の加算区分に基づいて、遡って支給を行って差し支えない。

いずれの場合も、更正通知書を受け取った日の翌日から15日を超えて受給資格の認定申請が行われた場合には、遡って申請・届出があったものとみなせなくなるため、注意するよう周知を図ること。

当該取扱いについては、生徒が既に高等学校等を卒業した場合においても同様とし、支給に係る手続は、卒業した高等学校等を経由して行うことを基本とする。

また、支給を受けていた生徒について、所得税法に係る更正又は決定により、所得割額が所得制限もしくはそれぞれの加算区分の基準額を超えることとなった場合は、当該更正又は決定の原因を問わず、要件に該当していなかった月分の支給額又は加算支給額は全額返還する必要がある。

なお、上記取扱いは平成29年4月からの申請・届出について適用することとし、それ以前の申請・届出については遡及して適用しない。

Q8-5 平成22年の制度開始前に履修した単位の計算

平成22年4月の制度開始前に履修した科目（履修期間が満了しているものに限る。）の単位数についても、74単位の計算に含むものとする。ただし、この場合においては、年間30単位を限度とするのではなく、履修科目の全ての単位数を74単位の計算に含めるものとする（例えば、制度開始前に1年間で35単位履修した上で退学した生徒の残支給単位数は、 $74 - 30 = 44$ 単位ではなく、 $74 - 35 = 39$ 単位）。

Q8-6 平成22年以降受給資格を有していなかった期間に履修した単位の計算

受給権のない生徒（①所得制限の要件に該当することにより受給資格が消滅、②（所得制限の要件に該当することを見越して）認定申請をしていない生徒、③収入状況届出書等を期限内に提出しなかったことにより支払の一時差止めを受けている生徒）が履修する科目の単位についても、現に就学支援金の支給を受けたかどうかに関わらず、支給対象単位数の上限である74単位、年間の支給対象単位数の上限である30単位の計算にそれぞれ含むものとする。この場合において、74単位の計算に含めるのは、年間30単位を限度とする。

Q8-7 併修先の単位の計算

留学先の現地校、定時制・通信制等の併修先の高等学校等及び高等学校等以外の学校（大学、専門学校、就学支援金制度の対象となっていない専修学校一般課程など）における学習、学校外活動（ボランティア活動、就業体験及び高等学校卒業程度認定試験の合格など）について、就学支援金の支給

を受ける高等学校等に授業料を支払わない場合は、卒業に必要な単位に換算される場合であっても、就学支援金の支給対象単位数の上限である 74 単位及び年間の支給対象単位数の上限である 30 単位の計算には含めない。

Q 8-8 定額制授業料と単位制授業料を併用している場合

同一課程内において、定額で徴収する授業料と単位当たりで徴収する授業料を併用している場合は、1 単位当たり授業料を定額授業料÷履修単位数+1 単位の授業料として算定すること。

具体的な計算は以下のとおり。

例) 年間授業料 10 万円に加え、1 単位当たり授業料 1 万円を徴収する授業料設定の課程で
年 30 単位履修する場合。
1 単位当たり授業料=100,000 (円) ÷ 30 (単位) + 30 (単位) × 10,000 (円)

9 届出

Q 9-1 申請と届出の違い

申請は、生徒等が受給資格を有していないことを前提に都道府県知事に対し受給資格の認定の申請を行うものであり（法第 4 条）、届出は法 4 条の申請に基づき受給資格を認定された受給権者が、毎年度都道府県知事の定める日までに保護者等の収入の状況に関する事項を届け出るものである（法第 17 条、規則第 11 条）。

申請に基づく支給は、受給権者が認定の申請をした日（当該申請が支給対象高等学校等の設置者に到達した日）の属する月から始め、当該就学支援金を支給すべき事由が消滅した日の属する月で終わる（法第 6 条第 2 項）。届出に基づく支給は、届出のあった日の属する月の翌月から開始し（提出があった日が月の初日である場合は当該月分から）、当該就学支援金を支給すべき事由が消滅した日の属する月で終わる。

法第 4 条（受給資格の認定）

前条第一項に規定する者（同条第二項各号のいずれかに該当する者を除く。）は、就学支援金の支給を受けようとするときは、文部科学省令で定めるところにより、その在学する高等学校等（その者が同時に二以上の高等学校等の課程に在学するときは、その選択した一の高等学校等の課程）の設置者を通じて、当該高等学校等の所在地の都道府県知事（当該高等学校等が地方公共団体の設置するものである場合（当該高等学校等が特定教育施設である場合を除く。）にあつては、都道府県教育委員会）に対し、当該高等学校等における就学について就学支援金の支給を受ける資格を有することについての認定を申請し、その認定を受けなければならない。

法第 6 条（就学支援金の支給）

2 就学支援金の支給は、受給権者が第四条の認定の申請をした日（当該申請が支給対象高等学校等の設置者に到達した日（次項において「申請日」という。）をいう。）の属する月（受給権者がその月の初日において当該支給対象高等学校等に在学していないとき、受給権者がその月について当該支給対象高等学校等以外の高等学校等を支給対象高等学校等とする就学支援金の支給を受けることができるときその他政令で定めるときは、その翌月）から始め、当該就学支援金を支給すべき事由が消滅した日の属する月で終わる。

法第 17 条（届出）

受給権者は、文部科学省令で定めるところにより、都道府県知事（第十四条第一項又は第二項に規定する就学支援金に係る場合にあつては、文部科学大臣。次条第一項において同じ。）に対し、保護者等の収入の状況に関する事項として文部科学省令で定める事項を届け出なければならない。

規則第 11 条第 1 項（収入の状況の届出等）

法第十七条に規定する届出は、受給権者が、毎年度、都道府県知事の定める日までに、収入状況届出書等を、支給対象高等学校等の設置者を通じて、都道府県知事に提出することによって行わなければならない。ただし、法第八条第一項の規定により就学支援金の支給が停止されている場合にあつては、前条第二項の規定により行うものとする。

Q 9-2 年度途中に保護者等に変更があった場合

所得要件の確認を行う保護者等は、就学支援金が支給される当該月ごとの保護者等となる。したがって、年度の途中で婚姻もしくはその解消、受給権者が成年に達した等により保護者等に変更がある場合には、速やかに個人番号カードの写し等又は課税証明書等を添付した収入状況届出書を、県に提出する必要がある。ただし、両親の再婚・離婚の場合など、既に片方の個人番号カードの写し等又は課税証明書等を提出しているときは、当該個人番号カードの写し等又は課税証明書等を改めて添付することを要しない。

この場合において、保護者等の変更により、所得制限基準に該当することにより支給されなくなる
とき又は支給額が減額されるときは、保護者の変更の事由が生じた日の属する月の翌月分から（当該
事由の生じた日が月の初日である場合は当該月分から）支給額が変更される。

一方、保護者等の変更により、就学支援金の支給額が増額されるときは、収入状況届出書等の提出
があった日の属する月の翌月分から（提出があった日が月の初日である場合は当該月分から）支給額
が変更される。

また、保護者等の変更により、新たに受給資格の要件を満たすことになる（所得制限基準に該当し
なくなる）生徒は、認定申請が可能となる（ただし、月の初日において保護者等の所得が所得制限基
準を下回ることが必要。）。

なお、保護者等に変更が生じたにもかかわらず、所得制限基準以上であることが明らかであるため、
個人番号カードの写し等又は課税証明書等を取得・提出することを拒否する者が生じ、そのことによ
り、就学支援金支給の適正な執行に支障が生じるおそれがあると県が判断した場合は、収入状況届出
書等に代えて、例えば、受給権放棄の申出書等を提出させることにより、受給資格を消滅させても差
し支えない（それにも応じない場合には、法第 18 条に基づき保護者等に対し報告若しくは文書その
他の物件の提出等を求めることもありうる。）。

Q 9-3 差止めについて

差止めは収入状況届出の提出がない場合に、法第 9 条に基づき行われているもので、生徒等が受給
資格を有していることが前提である。

Q 9-4 差止期間中に届出があった場合の支給

支払の一時差止め期間は 7 月～翌年 6 月を基本とし、期限を超過して収入状況届出書等の提出があ
った場合に、提出があった翌月分から支給することとして差し支えない。ただし、提出しなかったこ
とに正当な理由があった場合には遡って支給する。なお、一時差止めを受けている者が、翌年 7 月に
収入状況届出書等の提出を行わなかった場合は、さらに 1 年間を基本とし、支払を一時差し止める。

一時差止めを受けている者（休学に伴い支給停止されている者を含む。）が、収入状況届出書等
の提出を行ったところ、所得制限基準額以上であった場合は、7 月（当該届出が 4～6 月であった場
合は前年 7 月）に遡り受給資格が消滅する。

7 月に収入状況届出書を提出せず支払の一時差止めを受けた後、休学して支給停止をした者が、翌
年の 6 月を迎えるまでに復学して支給再開申出書と個人番号カードの写し等又は課税証明書等を提
出し、支給要件に適合すると認められる場合は、支給を再開する。

10 受給権放棄

Q10-1 受給権放棄の手続き

就学支援金の受給権は、申請に基づき認定され付与される権利であるため、就学支援金を受給する
権利を放棄することも受給権者であれば可能と解される。例えば、年度の途中で何らかの理由で就学
支援金の受給を辞退すること等が考えられる。この場合は、生徒本人から受給権放棄の意思表示がさ
れた後、受給権放棄の手続きをした時点で受給資格が消滅する。

なお、各都道府県において申請書又は届出書に併せて就学支援金の受給意思を確認する書類を配布
し、受給権放棄の意思確認をすることが可能である。

Q10-2 受給権放棄後に再度申請があった場合

受給権を放棄したため、受給資格が消滅した生徒が、改めて法第 4 条に基づく申請を行うこと
も可能である。受給資格が認定された場合は、申請した日の属する月からの支給となる。

11 代理受領

Q11-1 転学の際の代理受領

月の途中で生徒が転学した場合、その月の初日に在籍していた学校の設置者が就学支援金を代
理受領する。なお、月の途中で他の高等学校等に転学等をした生徒については、転学等をした後の

高等学校等においては同月分の就学支援金は支給されないため、同一の都道府県立の高等学校等の場合は、転学元の高等学校等で授業料を課し、転学等をした後の高等学校等において同月分の授業料を徴収しないこととすることが望ましい。

Q11-2 学校における会計処理

代理受領した就学支援金は、「授業料」として会計処理を行う。なお、就学支援金に係る原資等を県から受け入れた場合には、一旦「預り金」として受け入れ、授業料の納付期限が到来したときに「預り金」で受け入れた就学支援金のうち確定した就学支援金に相当する額を、「授業料」に振り替えることが妥当である。

なお、参考までに、就学支援金を収納した場合の仕訳は次のようになる。

【月次で授業料収入を収納している学校法人が、授業料から就学支援金相当額を差し引いた額をあらかじめ生徒から収納し、かつ、就学支援金を都道府県から受け入れた場合】

○ 高等学校等就学支援金3月分が、県から学校法人に入金されたとき (高等学校等修学支援金3月分全額について、「預り金」で処理)			
(借) 現金預金	×××××	(貸) 預り金受入収入	×××××
○ 授業料の納付期限が到来したとき (生徒からの入金分を「授業料」で処理し、高等学校等就学支援金について「預かり金」で処理したうち1月分を「授業料」に振り替え)			
(借) 現金預金	×××××	(貸) 授業料収入注(1)	×××××
預り金支払支出	×××××	授業料収入注(2)	×××××

注(1) 授業料から就学支援金相当額を差し引いて生徒から収納した額

注(2) 就学支援金について「預り金」で処理したうち1月分の額

【月次で授業料収入を収納している学校法人が、就学支援金を県から受け入れる前に、生徒から授業料全額をあらかじめ収納する場合】

○ 生徒から授業料全額を収納したとき			
(借) 現金預金	×××××	(貸) 授業料収入	×××××
○ 高等学校等就学支援金3月分が県から学校法人に入金されたとき (高等学校等就学支援金3月分全額について「預り金」で処理し、高等学校等就学支援金について「預り金」で処理したうち生徒への返還相当額を「現金預金」に振り替え)			
(借) 現金預金	×××××	(貸) 預り金受入収入	×××××
預り金支払支出	×××××	現金預金	×××××

学校設置者が預り金として就学支援金を受け入れている間は、他の資金と明確に区別し、透明性のある会計処理を行う必要がある。また、この間、就学支援金を預金することにより利息収入が生じないように、就学支援金のみ当座預金口座等により管理を行うことが望ましい（なお、やむを得ない事情により当座預金口座等による管理が行えない場合は、当該利息収入を学校の教育活動に係る経費等に充当することは可能）。

12 休学

Q12-1 支給停止の手続き

休学により支給停止されている場合（一時差止めを受けている者が支給停止されている場合を含む。）は、生徒が支給再開の申出を行う際に、支給再開申出書（様式24（省令様式第3号））に収入状況届出書等を添付するものとする。

Q12-2 生徒から支給停止の申出がない場合

一時差止めを受けている者が休学する場合は、支給停止の申出を行わなければ、36月の期間の通算から休学期間を除くことはできない。

Q12-3 生徒が入学と同時に休学する場合

生徒が入学と同時に休学するなど、認定申請書と同時に支給停止申出書を提出した場合、就学支援金は認定申請書の提出があった日の属する月分から支給されることから、支給停止申出書の提出が月の初日でなくとも、当該月分から就学支援金の支給を停止する。

Q12-4 支給再開の申出があった場合の手続き

支給停止・再開申出書の提出があった日の属する月の翌月分から支給停止・再開する（ただし、支給停止・再開申出書の提出があった日が月の初日である場合には、当該月分から支給停止・再開する。）。

Q12-5 復学前に支給再開の申出があった場合

復学前であっても支給再開の申出を行うことはできる。この場合、休学期間中に授業料が生じていれば、支給再開申出書等の提出があった日の属する月の翌月分から（月の初日の場合は当該月分から）、就学支援金の支給を受けることができる。

Q12-6 復学日までに支給再開の申出がない場合

復学日の属する月までに支給再開申出書の提出がない場合は、その翌月分から（復学日が月の初日である場合は当該月分から）、支払の一時差止めを行うこととなる。ただし、復学日が月の末日であるなど、復学後その属する月内に支給再開申出書を提出することが困難と認められる場合は、復学後速やかに当該申出書の提出があったものとして取り扱って差し支えない。

復学後に支給再開申出書のみ提出され、収入状況届出書及び個人番号カードの写し等又は課税証明書等が提出されない場合は、支給再開申出書の提出のあった日の属する月の翌月分から（月の初日の場合は当該月分から）、支払の一時差止めを行うこととなる。

なお、支給停止されている者であって、復学時に所得制限基準に該当することを理由に収入状況届出書及び個人番号カードの写し等又は課税証明書等の提出を拒否する者に対しては、受給権の放棄の手続きを取るにより、受給資格を消滅させる方法も考えられる。

13 転学

Q13-1 転出入する場合の支援金の算出方法

＜転学の場合における転学後の支給期間（一般ルール）＞

- i) 全日制高校等の場合
→「36月から高等学校等に在学した月数（支給停止期間を除く。以下同じ。）を除いた月数」とする。
- ii) 定時制課程等の場合
→「48月から高等学校等に在学した月数を除いた月数」とする。
- iii) 全日制高校等から定時制課程等に転入した場合
→「48月から高等学校等に在学した月数 $\times 4/3$ （端数切捨て）を除いた月数」とする。
- iv) 定時制課程等から全日制高校等に転入した場合
→「36月から高等学校等に在学した月数 $\times 3/4$ （端数切捨て）を除いた月数」とする。
- v) 学年制の全日制高等学校から単位制の定時制高等学校に転学した場合
→「48月から高等学校等に在学した月数 $\times 4/3$ （端数切捨て）を除いた月数以内で、74単位から過去に履修した科目の（実際に単位を修得したかを問わない）単位数を除いた単位数を上限」とする。
- v) 単位制の定時制高等学校から学年制の全日制高等学校に転学した場合
→過去に取得した単位数に関係なく「36月から高等学校等に在学した月数 $\times 3/4$ （端数切捨て）を除いた月数」とする。
- v) 全日制高校等と定時制課程等の間を複数回転出入している場合
 - a. 全日制高校等に転入する場合
→ $36\text{月} - (\text{全日制等月数} + \text{定時制等月数} \times 3/4)$ （端数切捨て）
 - b. 定時制課程等に転入する場合
→ $48\text{月} - (\text{全日制等月数} \times 4/3 + \text{定時制等月数})$ （端数切捨て）

上記一般ルールに基づき、以下のとおりとする。

パターン (1) 学年制から単位制（単位ごとに授業料を徴収する場合）に転入

（例）・全日制（学年制）高校を1年次の12月在籍、32単位履修で転出、定時制（単位制）高校に転入

① 転入後の支給期間（一般ルール）

残支給期間： $48\text{月} - 12\text{月} \times 4/3 = 32\text{月}$ 以内で支給

② 転入後の支給額（単位ごとに授業料を徴収する場合のルール）

$(74 - 32) = 42\text{単位}$ まで支給可能

※年間の登録上限は30単位。ただし、学年制在籍時の履修単位数には30単位の年間上限を適用させない。

パターン (2) 単位制（単位ごとに授業料を徴収する場合）から学年制に転入

（例）・定時制（単位制）高校に19月在籍、登録単位35単位（1年目：20、2年目：15）で転出し、全日制（学年制）高校に転入

※登録単位数によらず、既支給期間に基づき残りの支給期間を算出する

① 転入後の支給期間（一般ルール）

残支給期間： $36\text{月} - 19\text{月} \times 3/4 = 22\text{月}$ まで支給可能

② 転入後の支給額

月額（9,900円（全日製の1月あたりの授業料額）） $\times 22\text{月}$

Q13-2 年度途中で単位制授業料の高校に転入した場合

(例) ある生徒が、A校において、12月の履修期間で当該年度に25単位を登録し、4月から10月までの7月間在学した。(ただし、当該単位に係る科目の履修は修了していない。)その後、当該生徒がB校に入学し、当該年度に10単位を登録の上11月から3月までの5月間在学した。

① A校での履修を承継してB校に入学した場合

- 1単位当たりの支給限度額を除く月数は、A校で履修期間として登録した月数とし、合算する単位数は、B校で登録した単位数とする。

B校での1月あたりの支給限度額： $4,812円 \div 12月 \times 10単位$

- A校からB校への異動の際に継承しなかった15単位は、履修期間が満了しなかったことになるため、3年間の合計で74単位までとする支給単位の上限の計算に含まない。

② A校での履修を承継せずB校に入学した場合

- 1単位当たりの支給限度額を除く月数は、B校で履修期間として登録した月数とし、合算する単位数は、B校で登録した単位数とする。

B校での1月あたりの支給限度額： $4,812円 \div 5月 \times 10単位$

- A校で登録した25単位分は、B校への入学の際に承継せず履修期間が満了しなかったことになるため、3年間の合計で74単位までとする支給単位の上限の計算に含まない。

※履修期間満了の考え方が休学时と異なるので注意 (Q13-3 参照)

Q13-3 年度途中で休学した場合の残支給期間と残支給単位

(例) ある通信制高校において、履修期間の2/3の履修(出席)を満了し且つ期末試験に合格すれば単位が取得できる場合、履修期間12月、2単位の科目について、生徒Aは最後の4ヶ月を休学したが期末試験には合格したため単位を修得し、生徒Bは最後の4ヶ月を休学したが期末試験には合格しなかったため単位を修得できなかった。

この場合、生徒Aと生徒B共に残支給期間と残支給単位数は、以下のとおりとなる。

①支給停止手続を行った場合

- 残支給期間：支給停止手続を行った翌月から支給期間が停止する。

48月－8月＝40月

※休学中の履修期間(4月)分は支給しない。

- 残支給単位数：休学(支給停止)期間にかかわらず、全ての履修単位数を支給単位数の上限に含める。

74単位－2単位＝72単位

②支給停止手続を行わなかった場合

- 残支給期間：すべての履修期間を支給期間の上限に含める。

48月－12月＝36月

※休学中の履修期間(4月)分も支給する。

- 残支給単位数：休学期間にかかわらず、全ての履修単位数を支給単位数の上限に含める。

74単位－2単位＝72単位

※履修期間満了の考え方が退学时異なるので注意 (Q13-2 参照)

Q13-4 単位修得のない専修学校における履修の単位換算

単位修得のない専修学校高等課程における履修を単位数に換算する場合は、専修学校設置基準第23条第2項において、一単位当たりの授業時数は、35単位時間をもって1単位とすることと規定されていることから、以下のとおり算定する。

(例) 前籍校(高等専修学校)において800時間の授業を受け、その後、単位制高校に転入する場合の残支給単位数

$74単位 - (800時間 \div 35時間) = 51単位$ (端数切り捨て)

Q13-5 前籍校での履修単位数が確認できない場合

前籍校が、学校教育法施行規則第28条第2項における保存期間5年が経過した後に指導要録等を破棄し、前籍校における履修単位数が確認できない状況で単位制高校に入学する場合は、支給期間の上限（全日制高校等：36月、定時制課程等：48月）に対する前籍校の在籍期間（休学期間を含む）の割合に応じて、既履修単位数を算定する。

（例）前籍校に1年間在籍し（既履修単位数は確認できず）、新たに通信制高校に入学する場合の残支給単位数

74単位－74単位×12／48月＝55単位（端数切り捨て）

Q13-6 遡って退学・除籍となった場合

学校が、遡って生徒を退学や除籍としかつ学費を返還しないために授業料債権が消滅しない場合、退学・除籍を通知した日までの間の就学支援金を支給することができる。

Q13-7 旧制度が適用される場合

現行制度は、平成26年4月1日以降に高等学校等に入学した生徒に適用される。原則として、平成26年4月1日前から引き続き高等学校等に在学する者は、旧制度が適用される。ただし、平成26年4月1日以前に高等学校等に在学していた場合でも、一旦退学し、相当の期間を空けて、平成26年4月1日以降に再入学する際には、現行制度が適用される。

※ 「転学」や「それに類する退学・編入学」（例：3月31日退学、4月1日編入学）については「引き続き高校等に在学する者」に含まれるが、退学後に高校等の1学年4月から再入学する場合には「引き続き」在学するものに原則含まれない。「転学」に類する退学・編入学に当たるかどうかについては、実施主体の県で最終的に判断可能。

高等学校等間で転学した者、編入学した者についても、「引き続き高等学校等に在学する者」に含むものとする。

※ 編入学に関しては、退学・入学手続において退学日・入学日に一定期間（2・3日、1～2週間など）が空く場合があるが、県において、転学の場合と同様に「引き続き高等学校等に在学」していると認められるときは、旧制度の対象者とする。

現行制度適用者に係る就学支援金の支給期間には、過去に高等学校等（国公立の別を問わない）に在学していた期間が算入される。

14 その他

Q14-1 都道府県と学校の事務分担

就学支援金の支給を決定するのは都道府県であるが、保護者の所得を証明する書類の実質的な確認作業などについて都道府県が学校設置者に事務委託すること等は可能。

県は、生徒から保護者等の個人番号カードの写し等又は課税証明書等を添付した認定申請書（収入状況届出書（様式1（省令様式第1号）））の提出を受け、受給資格（第一章2（2）～（5））を認定し、支給額（第一章2（6）、（7）及び（9））を算定する。

具体的には、県は、学校設置者から提出された認定申請者一覧（様式2（収入状況届出者一覧（様式15）））に基づき、支給の可否及び支給額を判定する。

なお、所得確認事務については、他の事務と同様、学校設置者等当該事務を適正かつ確実に実施することができるものと認められるものにその業務を委託等することができるが、その際には、個人情報の取扱いに関する保護者や学校設置者の意見等を十分に斟酌した上で、具体的な取扱いを定め、適正かつ確実に実施されるよう適切に指導監督する。

加えて、受給資格や所得の確認事務を委託した場合には、委託先における確認結果が法令に則り適切に確認されたものとなっているか抽出して調査するなどにより、委託先の確認結果の妥当性について検証する。

Q14-2 様式の加筆・修正の可否

省令に規定されている様式（様式1、20、24）は、内容・趣旨が大きく損なわれない限り、各都道

府県の判断において加筆・修正が可能である。例えば、下線を引く、フォントを変更する、申請書・届出書に意向確認のチェックボックスを設ける等は可能である。

一方、罰則規定に関するチェックボックスと一つにまとめる、当該記載を申請書の後方に移動する等はいできない。

上記以外の任意様式は、各都道府県の判断で加筆・修正や削除・統合が可能であるが、各様式の法的位置づけは明確にされている必要がある。例えば、差止め通知の「差止め」という表現を、他の表現に変更する余地はあるが、その場合に法第9条に基づくものであることは明示することが望ましい。また、例えば法的位置づけが全く異なる「受給資格消滅」という表現に変更することは受給権者に誤解を招くことから不適切である。いずれにせよ、通知の相手方に処分の内容、法的根拠が誤解なく伝わるものであることが必要である。

Q14-3 時効

県と生徒との就学支援金の時効に関しては、就学支援金が過大又は過少に支給された時から5年間返還・追給の請求ができる。

「支給された時」とは支給額が確定した時であり（地方自治法第236条第1項、同条第3項、民法第166条）、年度途中概算払いで年度末に支給額が確定するような場合であれば、その年度末に確定した時となる。

また、受給資格の認定がされていないにも関わらず、支給されたときは、その支給を受けた時から、また、本来受給資格の認定がなされるべきにも関わらず、認定されず、就学支援金の支給が受けられなかった場合には、受給資格の不認定の処分を受けた時から、時効が進行する。

なお、後者の場合については、支給の開始時期については法第6条第2項及び第3項の適用を受ける。

上記に係る手続は、卒業した高等学校等を経由して行うことを基本とする。

地方自治法 第236条（金銭債権の消滅時効）

金銭の給付を目的とする普通地方公共団体の権利は、時効に関し他の法律に定めがあるものを除くほか、五年間これを行わないときは、時効により消滅する。普通地方公共団体に対する権利で、金銭の給付を目的とするものについても、また同様とする。

2 （略）

3 金銭の給付を目的とする普通地方公共団体の権利について、消滅時効の中断、停止その他の事項（前項に規定する事項を除く。）に関し、適用すべき法律の規定がないときは、民法（明治二十九年法律第八十九号）の規定を準用する。普通地方公共団体に対する権利で、金銭の給付を目的とするものについても、また同様とする。

4 （略）

民法 第166条（消滅時効の進行等）

消滅時効は、権利を行使することができる時から進行する。

2 （略）

Q14-4 処分の取消

受給資格の認定あるいは不認定の処分を行った後に、処分の成立上の瑕疵が判明した場合、各都道府県が当該処分を取り消すこと。取り消しの効果は原則処分成立時まで遡及する。なお、職権による取消は適法性・合目的性の回復を目的としているため、法令の根拠は不要である（最判昭43. 11. 7等）。

例えば、具体的には、本来は受給資格があるにも係わらず審査上の瑕疵により、受給資格が不認定となった場合や、高校既卒者であることを隠して違法に申請を行い、受給資格認定された場合など認定処分の根拠となる情報に誤りがあった場合が考えられる。

Q14-5 授業料と就学支援金の年度をまたいでの相殺

当該年度の支援金をもって前年度の授業料債権の弁済に充てることはできない。（例えば4月に支給された就学支援金を3月の授業料の弁済に充てる等）

また、授業料と、以前に支払われた就学支援金との相殺後の差額を滞納しているような場合でも、納付期限の到来により新たな授業料債権が発生した場合、就学支援金をもってこれを弁済することができる。

Q14-6 事務費交付金、奨学給付金、学び直し、家計急変の過年度支出

過年度支出は、会計年度独立の原則の特例であり、法律に根拠がある場合または国が債務を負っている場合にのみ認められる。就学支援金は、法律に基づく補助であり、また、法第6条第3項にやむを

得ない理由により申請ができなかった場合、遡及して申請できる旨が明示されているため、過年度支出を行うことができる。

高等学校等就学支援金事務費交付金、高校生等奨学給付金、学び直し支援事業、家計急変世帯への支援は、法律に基づく補助ではなく、予算補助事業であるため、過年度支出を行うことはできない。

なお、国が債務を負っている場合とは、国が債務を負担し、当該年度中に支払いを行うものについて、国が負担した債務に対する支払いの請求が翌年度以降に至ってなされた場合等をいう。